

いなあ、と思つてた。でも、世の中にどんな職業があるのか、よく知らなかったから、悩んだな。

そんな僕が今の職業に就こうと思つたのには、理由がある。僕は、言つたとおり、高校受験に失敗して、いやいやや学校へ通つていた。その学校には、文化祭も体育祭もなかったから、公立に行きたかったと、後師ばかりしていた。

だから僕は、教師として公立高校へ勤めて、なくした青春を取り戻してやろう、と心に決めたんやよ。(笑)

ただ、教師になるには、皆の前に立たなければならぬ。僕は、内気で、閉じこもりきみだつたから、これではあかん、自分を変えなければ、とプレッシャーをかけたらしいんや。(笑)

このように、進路に関してかなり苦労されたようである。今の先生の様子からは、想像しにくいかもしれないが……(すいません)。

また、当時は、先生いわく、<政治の季節>であった。次は、その辺りのことについて、語っていたにいたる。

「僕は政治にすごく関心があった。特に、公害問題で何の罪もない人たちに被害が集中する、そんな日本の資本主義体制に怒りを感じていたんや。もつと人間に優しい社会をつくりたい、世の中が変わらなければ、と思つてた。これが、社会の教師を目指した理由でもあるな。

だから、早く大人になりたくて、読めもしない難しい本なんかを、ムリによんだりしてたんや。(苦笑) 大人になれば、何かを変えられれると思つていたら、未来の世界に期待もしてたからなあ。」

う～ん、なかなかすごい高校生である。16歳で、自分なりの意見や考えをもつていたなんて。少なくとも、容姿ばかり気にしている昨今の高校生よりは、ずっと大人だったことだろう。(笑)

さあ、いよいよ最後になつてしまった。やはり、現代を生きる高校生へのメッセージをいただかないことには、終わろうにも終われない!……と思つた。

「今の子供は、人を頼りすぎている部分があると思うな。子供のままでいたい、と思つているかのようにも見える。昔は、<ゆとり>もあつて、受験競争もなかったから、多くの体験をしようと思えば出来たし、勉強に縛られることはそんなになかったしね。

でも、今の子には、<ゆとり>が足りないように感じるなあ。勉強ばかりじゃなく、多くのことを体験して、色々なことを、よく考え、見つめて欲しいな。そして、

## A

先生:

1951年に岸和田に生まれる。2男2女の四人兄弟の長男。今回は、先生の高校時代について、熱く、非常に熱く、語っていただいた。以下の文章は、それをまとめたものである。

「僕は、岸和田高校を受けたんやけども、不合格でね。それで、行きたくもない男の子校へ行くことになってしまつて。その学校は、もう勉強一筋というか、そんな感じだね。クラスも公立に落ちた人を集めたものやつて、大学で見返してやれ!みたいな事を言われたなあ。だから、皆が勉強ばかりしてたから、仲間意識みたいなのはなかったな。そんなわけやから、当然友だちもできない。結局、親友とよべたのは、一人ぐらいやつたと思つた。

何か打ち込めるものがあったらよかつたんやけど、部活も少なかったし、これと聞いた趣味、たとえば、ビートルズのレコードを買いあさる、みたいなものもなかったし……あへ、そういえば、荒木一郎っていう歌手は、よく聴いた。知ってる?知らないやろな……。<空に星があるように>とかは、有名なんやけど。あと、大阪の学校やつたんやけどね、方言が通じないときがあつて、苦労したのを覚えてるな。同じ大阪なのに、カルチャーショックをうけたんや。(笑)」

こんな風に、高校時代は、暗く、単調なものだったという。だから、はつきりいって、記憶もあまりないらしい。

そんな日々をふりかえつて、先生は、「灰色の青春(灰春)やつたなあ。」という。そんな先生にも、たった一つだけ、楽しかった思い出があるという。そう、修学旅行である。

「修学旅行で、北海道にいつてね。そこで初めて自由行動があつて、友だちとタクシーに乗つて、<味の三平>というラーメン屋さんに行つた。それが、一番の思い出やなあ。帰りに、マツチをもらつてきたのも覚えてるな。店の名前まで覚えてくるくらいやから、よっぽど嬉しかつたんやろな。(笑)」

さて、この辺で、当時考えていた進路について教えてくださつたので、紹介しようと思つた。

「僕の親は教師やつたけど、昔は、親と同じ人生はいやだから、違う道をあゆみた

